

畑田美智子ガラスアート展に思う

大阪人間科学大学教務課長、元大阪大学蛋白質研究所事務長 山下啓一

吹田市のメイシアター展示室で開催された畑田美智子ガラスアート展を鑑賞した。ここで使用されているガラスは、色ガラスが何層か重なって出来た合わせガラス（被せガラス）を使ったガラスアートである。ガラスアートと言えば、誰もが思い浮かべるアール・ヌーボーのエミール・ガレやドームである。彼らは、あらかじめ模様をマスキングしたガラスを薬品に浸し、ガラスを腐食させることによって模様を浮き出させ、色づけや絵付けなどを重ねて極めて繊細で自然な文様を彫り出し作品を仕上げているのだが、畑田美智子の作品はマスキングした下絵の上に、金剛砂を吹き付けてガラスを削り取るサンドブラストという手法を用いている。ガラスを削り取るという物理的な手法は単純であるが故に、極めて素朴な線を生むことが出来るのだと思う。

一連の作品は「和」をテーマにして製作されたという。描かれている世界は作者の原風景で、それはそのまま観る者の心の原風景である。だから観ていて素直に心が同期していく。真っ赤な太陽、真っ赤な富士、黄色く輝く満月、シルエットの山々、父と観た花火・・・作品を見ているうちに幼かった頃の心に返っている自分に気がつく。作者は自然と一緒に自然の移ろいを楽しんでいる・・・そんな純粋で、無邪気な心を持っておられると感じた。それこそが、「和」の心である。

ここで表現されている「和」はいわゆる「ジャポニズム」の和ではない。われわれ日本人が祖先から受け継いできた、「自然との調和の中の美」に感じる素朴な「和」だ。「ヤマト」と言う「和」は太陽や、月や、水や、大地や山などの自然が人々と調和を保った美しい国として「大和」と言ったのかも知れないと、作品を見ていてふと思った。そんな風に、改めて作品を見ると、ガラスを透過してくる光と色が僕の心の中に透過し、その光に吸い込まれるように描かれている自然の中に入っていくことができ、暖かな感動を感じた。

作者は、ガラスを削って生まれる微妙な光の変化や、二枚の色ガラスを透過することによって全く別の色が生まれる光の変化など、色と光の織りなす絶妙な綾を、極めて自然にさりりと利用して見せている。工房の中で、無機的なガラスに四季の移ろいや自然の息吹を刻み込む作業は、さながら作者の格闘なのかも知れないと思った。

MH 工房で創作する作者を見たことはないが、きっとその姿は人々の心に、温もりや心の豊かさを取り戻そうとする、作者の格闘する姿そのものなのだろうとも思った。

次回の、池田ギャラリーアートでの個展がどのような作品に満たされるのか楽しみである。

